

記念講演

歴史を直視し学ぶ



女流ノンフィクション作家・歌人

辺見 じゅん

辺見でございます。本日は地区の大会おめでとうございます。今日はどうぞよろしくお願いたします。

広島には私は今までもう30回ほど来ております。一昨年も福山市をはじめ、講演など来ておりますけれども、私は、呉で造られた戦艦大和を巡る物語『男たちの大和』を昭和58年に書きました。戦艦大和はこの広島・山口・鳥取・島根それから名古屋と、関東の方は戦艦武蔵ですが、こちらの方から九州にかけては戦艦大和の乗り組みの方たち、また亡くなられた方が大勢います。それを昭和58年に書いて、それが縁で何度もこちらにはうかがっております。

皆さんご存じだと思いますけれども、戦艦大和は、昭和16年日本がああ太平洋戦争に突入する少し前にできた艦です。それこそ世界一大きな艦と言われて、人によっては万里の長城、エジプトのピラミッドと並んで世界三大無用の物と、こういう風に言われた方もいます。と言いますのは、海軍はあの太平洋戦争に反対でした、それが戦艦大和という巨大な艦を造ったために、結局は海軍も太平洋戦争に積極的になっていったところがあるわけです。この戦艦大和は昭和20年4月7日、東シナ海で沈没しました。最後の乗り組みの正確な人数は分かっておりませんが、3332名と言われております。私はそれに員数外の1人を加えまして、3333名と『男たちの大和』では書いております。昭和20年の4月、生存者は（乗り組みの）1割にも満たない265名でした。

大和はなぜ世界一の艦かと言いますと、アメリカではパナマ運河を渡るために戦艦の幅が決められております。ですから、大きさとそれからあらゆる科学の技術の粋を集めたと言われるくらいの艦でございました。昭和20年に戦争で負けた後、アメリカの調査団が来て、大和の設計者などを集めて「これほどすごい規模の船だったのか」と驚いたそうです。大和が東シナ海に沈没した時は、終戦内閣と言われる鈴木貫太郎首相の内閣ができた日でした。私は長いことだれが天皇に大和が沈んだことをご報告申し上げたのか、本を書く時にいろいろ調べてみましたが、日本側の資料ではなくアメリカ側の資料でそれが分かりました。米内光政海軍大臣が大和が、沈没して約1時間後ぐらいに天皇にご報告申し上げていました。その時、米内光政海軍大臣は「これにて連合艦隊は壊滅しました」、このように申しております。つまり4月7日は日本の終戦内閣ができたと同時に、戦艦大和が東シナ海で沈没した日でもあります。ちょうどそのころの3月末、戦艦大和をはじめ第2艦隊が沖繩に向かって水上特攻に向かったときには桜がちらほらと咲いておりました。そしてアメリカの艦隊に蜂の巣のように爆撃を受けて、大和は弾薬庫を誘爆し沈みました。そして生き残った人々は海上に投げ出され、漂流をして、そして雪風であるとか冬月であるとかという駆逐艦に助け出されて、九州の佐世保に着きました。その時、佐世保はひな壇のようになっている、桜が満開だったそうです。あ

る兵士は、「たくさんの戦友を一瞬にして失い、1割にも満たない260数名だけしか助かった人はいなかった。それなのに佐世保に着いてみたら桜は爛漫と咲いている」そう言っ気がふれたようになったそうです。それは、自分たちはあんなに血みどろの戦いをしてきたのに、自然はきちんと巡ってきて、まるで平和の象徴のように桜は咲いている。桜は海軍の象徴でもありました。それだけに一体この戦いは何だったんだろう？ という気持ちが兵士たちの中に宿ったのではないかと思います。私にこの話をしてくれたのは、北海道の室蘭に住むお医者さんです。この人は戦艦大和が沈んだ後、助け出され、その時耳が聞こえなくなりました。それで逆にお医者さんになろうと決意して北海道大学の医学部に入り、そして室蘭で耳鼻科のお医者さんをしておりました。この方の奥さまにお目にかかりましたけれども、いつもは正常なのに、4月7日の戦艦大和が沈んだ時になると、何十年経っても主人は心が乱れてくるんです。夜中にぱっと起きて眠れなくなると言われました。そういう時はどうするんですか？ と奥さまにうかがいましたら、そのとき奥さまは主人をしっかりと抱き締めてあげるんですとおっしゃいました。今日は奥さま方もいらっしゃいますが、ぜひご主人の精神が不安定になられたときにはしっかりと抱き締めてあげてください。そのお医者さまは「それで何とか自分は生きてるんだ」ということをおっしゃいました。ですから、生き残った者にとっても戦後は非常に重い物でした。（戦艦大和黒田軍医長以下27名。第二艦隊司令部寺門艦隊軍医長以下12名。計医務科員総員39名総員戦死）

もう今はお亡くなりましたけれども、広島県の山の方の上下というところにいらした方は、両足が無かったです。海に投げ出されたときにサメに食べられてしまったというんですね。この方は小学校の先生でした。子供たちと遊ぶのが大好きでした。でももう両足が無くなるとは、子供たちと遊ぶこともできません。後に町の教育長になられましたけれども、やはりこの方の奥さまはこんな風に言

ってました。「主人は両足がない。だから私は逆に結婚したんです」

恐らく今の若い人は何故？ というかも知れない。でも私は、戦前の女性たちは偉かったと思うんです。主人は戦争で両足を無くした。だから人の悲しみも分かるんじゃないか。普通の健康な人よりもかえって人の辛さや悲しみが分かるんじゃないかと思って私は一緒になりましたと、そういう風に奥さまは言っていました。

そのように、（生還者260数名中、証言を得られた）160数名の生存者の人たちにも160いくつかの人生がありました。もう今では恐らく100名前後ではないかと思えます。その中には15歳の少年兵も混じっていました。私が戦艦大和の話を書こうと思ったのには、ある山里で1人のおばあさんに会ったからなんです。そのころ私は民俗学を学び、村の歴史であるとか、昔の伝説であるとかを集める仕事をしていました。その時、何やら乳母車でお地蔵さんのところへ来て、お供え物をしているおばあさんに会ったんです。そのおばあさんにこの辺りの昔話を聞かせてくださいと言いましたら、「みんな勤めに出て、うちにはだれもいないから来なさい」と言われて、そのおばあさんの家に行きました。そうしたらおばあさんが、「実は息子は戦艦大和で死んだんじゃ」という話を始めました。「でも、わしはどうしても信じられない」と言って何通かの軍事郵便というハガキを見せてくれました。みんな万年筆で立派なことが書いてありました。ところが1通だけえんぴつで、ひらがな混じりのそれこそたどたどしい字のハガキがありました。そこにはこんな風に書いてありました。

「おとうさん、おかあさん、道男はりっばにおくにのためにほうこうしております。たんぼはいかがですか？ どうか道男のことは、けっしてけっしておわすれください。さよなら。さよなら」という手紙でした。道男というご自身の名前だけが漢字で後はひらがなです。道男さんは、お家が貧しかったため

に志願兵となりました。「たんぼはいかがですか？」とあったのは、親たちが「うちにたんぼがあったらなあ」と話していたからなんです。それで兵隊に志願してお金をもらったら、それを全部うちに送っていたんです。志願したのが15歳で、亡くなったのは18歳。まだまだ甘いものもほしい年齢だったと思うんですけれども、それこそ1銭も使わずうちに送ってありました。それである時、親がたんぼを少し買ったよという風に多分知らせたと思うんです。道男さんは、それまでは上官の人に手紙を書いてもらっていたんです。だけど最後の手紙だけはえんぴつをなめながら自分で書いた。だから「たんぼはいかがですか？」って書いたんですね。親は道男のお陰でたんぼが少し買えたと言うけれども、そのたんぼを自分は見ることができない。田植えをし、そして秋にはたわわに稲が実り、それを刈り取る。それも見ることができない。恐らく3月末、呉を大和が出港する前に手紙を書いてもいいと言われた時に、これが最後じゃないかな？ そう思ったんでしょう。そして「どうか道男のことは、けっしてけっしておわすれください」って書いたわけです。普通ならば、文法的には「決してお忘れくださるな」なんですけれども、道男さんは自分のことは忘れてくれ、と書いているんです。そして最後には「さよなら。さよなら。」と2つ続けたんですね。きっと万感の思いで書いたんじゃないかと思うんです。

私はその手紙を見た時に、大和はこういう下士官たちが乗っていた艦なんだ。大和ってどんな艦なんだろうと思って、東京の国会図書館に行っているいろいろ調べました。そうしましたら、ある歴史家がこんなことを書いてました。「太平洋戦争は大和によって始まり、大和によって終わった」。この意味は、ちょうど太平洋戦争が始まったときに、大和はこれで立派に乗れるという公試運転が終わっているんです。そこから帰ってくる時にあの真珠湾に向かう連合艦隊がその同じ海を渡って行ったわけです。そして4月7日、アメリカ側の資料に寄りますと、米内海軍大臣が天皇陛下に「連合艦隊はこれにて壊滅しました」と

言っています。恐らく天皇陛下のお耳には日本は勝つんだというようなきれいなことだけで、本当の現状は入っていなかったんじゃないかと思います。これは会社でも言えますよね？ 会社でも社長になると周辺にきちんとした人がいないと情報が入ってこない。それと同じように、天皇ともなればますます入りにくい。実は痛いことを言ったり厳しいことを言ったりする人が会社でも日本に必要で、会社でも総理大臣でも、側にお世辞のようなことばかりを言う人を集めていては一番危ないわけです。ですから天皇陛下も、本当の意味では日本がどういう位置にあるのかが分からなかったんじゃないかと思います。陸軍は戦争を終わらせることに反対していましたし、天皇陛下による終戦の玉音放送が8月15日にずれてしまった。そのために広島・長崎という大きな犠牲を払わなければ日本はポツダム宣言受諾までに行かなかった。これが日本の悲劇でもあります。でも恐らく本当の意味では、4月7日の時点で日本は破れていたわけです。私は、昭和史というものを調べてみてスイスを巡る和平工作もありました。今日はその話は省略しますが、後にアメリカのCIA長官になるダレスさんと日本の海軍中佐だった人、それから朝日新聞の論説委員になる笠信太郎さん、そういう方々を巡って密かに米内海軍大臣宛の「日本は早く戦争をやめなければだめだ。これ以上犠牲を増やしてはいけない」という暗号の手紙が、20年3月ごろから頻繁に来てたんですね。でもそれも恐らく握りつぶされて、天皇陛下の耳には届いていなかったのでしょうか。

私がこの『戦艦大和の男たち』を書いたのは、ある意味で太平洋戦争の象徴がこの戦艦大和にあるのではないかと思ったからなんです。大和の長さは東京駅の端から端まで、大和独特の主砲は東京から大船まで飛んだそうです。しかし、実際に大和が主砲を打てたのはレイテ沖海戦だけでした。海軍はとっておきの艦だということで大和を温存していたんです。ところが昭和20年3月、天皇陛下が「も

う艦はないのか？」ということを申され、あわてて軍令部長は大和を特攻に出します。水上特攻といって、沖縄に向かわせる。その時の大和に乗って居られた第二艦隊司令長官は伊藤整一中将という九州出身の方でした。この方はアメリカに海軍武官として駐在していました。ですから戦争を始める時から、アメリカと日本が戦争をしたって勝てるはずじゃないかと分かっていたわけです。しかし石油が無くなったり、日本には日本の事情があったりして、不幸にも戦争に突入してしまった。第二艦隊旗艦大和の最後の司令長官となった伊藤整一中将は、水上特攻と言われて、こんな無謀な戦いはないと言って拒否するんです。そのとき軍令部から徳山沖にいた大和に知らせが来ます。そして伊藤整一中将に一言言います。これはもう論理を超えています。「死んでもらいたい」、伊藤中将は大変聡明な方でしたが、その一言で、分かりましたと決意するんです。沈没する寸前、伊藤整一中将は「生き残れる者はみんな生き残ってくれ」と言って、ご自身は自分の部屋に閉じこもりピストル自殺をします。この方がアメリカ時代とても親しかったのが、実はアメリカ海軍のトップであったスプルアンヌ隊長でした。日米の海軍の両方のトップは実はアメリカとても親しい仲だったんです。しかし、大和は艦ではなく飛行機によって沈没します。その時、大和を撃沈した飛行機の責任者は「惜しい艦を死なせてしまった」、そういう風に言ったそうです。

1つの艦を巡る物語にもいろいろなことがあります。実は昭和60年、海の墓標委員会というのを作りました。これは戦後40年経っても大和が東シナ海のどこで沈んだか分からない。私が話した岡山のあの少年兵、道男さんのお母さんは、道男が死んだとはどうしても思えないと言いました。役場からお骨を取りに來いと言われたので、出掛けて行って、白い布にくるまれた箱をもらった。帰りそれを抱き締めながら歩いてきたけれども、こんなに軽くて道男の骨が入っているんじゃないか？ と思って道端で開けたそうです。そし

たら、「お写真」と書いた紙が1枚だけ入っていました。それで私が会ったときはもう80歳を過ぎていた道男さんのお母さん、小梅さんというおばあさんは、「何で道男が死んだと思うじゃろう。わしは道男の骨が見つかるまで絶対に死にとうない」と言いました。それが私を、東シナ海で何とかして大和を見つけたい、大和の慰霊祭をしたいという気持ちにしたんです。ですけれどもこれは個人ではできません。そこで海の墓標委員会というのを作ってもらいました。新聞社は読売新聞と組みました、テレビはNHKと民放を代表して日本テレビ、そして独占手記は週刊朝日という風にいたしました。その時の読売新聞の責任者が、実は広島テレビの今の会長をなさっていらっしゃる山本さんだったんです。この山本さんが当時、読売新聞の会長や社長を説得し、海の墓標委員会を作ってくださいました。NHKの当時の責任者は川口さん。後にNHKの会長になられた方です。そういう風にいろいろな方々の協力があった。私が委員長になったのは、女を委員長にすれば自分が牛耳れるだろうという男の人たちの気持ちもあったんじゃないかとも思いますが、私が委員長になり、副委員長には元海軍の士官で、長門などを書いていらっしゃる作家の阿川弘之先生になってもらいました。もう1人の副委員長は大和の生存者で四日市にいらっしゃる内田さんという方でした。それこそ全身に傷を負って、顔も曲がって、何回も手術をするのに麻酔もかけられないという苦勞をされた方。士官ではありません。元下士官の方になってもらいました。そして外人記者クラブでこの話をしました。その時、アメリカ、イギリス、フランスが潜水艇を出すと立候補してくれました。日本には東シナ海に行くと大和を探す潜水艇がなかったのです。日本はアメリカと戦ったのだからアメリカの潜水艇を借りるわけにはいかない、そして私は大和だけじゃなく海で亡くなった死者たちに恨まれてしまうと思いました。フランスは非常に個人主義の国ですから、全部の版權をフランスによこせと言うんです。何にも条件を付けな

かったのがイギリスだったです。イギリスは元海軍士官を出すと云いました。日本の海軍はイギリスから学びました。それでイギリスからパイセス2という潜水艇を借り、鹿児島から16時間ほどの距離にある東シナ海で1週間ほどの調査をし、ほぼ大和であるだろうというのが分かって、遺族や生存者を乗せた船で東シナ海へ向かいました。東シナ海に行つて何日目かで大和が見つかりましたが、その1番のポイントは実は菊の御紋章にあったわけです。潜水艇には元イギリス海軍の士官が乗っていて、その海軍の士官が思わず「エンペラーズ・シンボル！」と叫んだのです。不思議なことに海底で、船は大きく3つに投げ出されていて、艦橋からは粉々になっていた程ですけれども、何故か菊の御紋章は海底の中で金箔が取れていかなかったんです。私も、広島に今もお元気で住んでいらっしゃる三笠さんとジョン・ジュリーというイギリス元海軍の士官と3人でパイセス2という潜水艇に乗りました。ところが、私が乗ったときだけそのパイセス2は事故を起こしてしまいました。ドスンというすごい音をたてて、海底でその潜水艇が動かなくなったんです。ハッと見渡すと、海底にまるでギリシャの神殿のようなすごい円柱があり、不思議な明るい寂しい光景が展開されていました。実は、これはたった1度だけ大和の艦底の中に入ってしまった、それも最も悲惨な戦争が行われたところに事故のために入ってしまったんです。上の方では、無線は途絶えるし、一体どうなったんだろうということになっていました。助け出されたとしても日本の潜水艇では助け出せない。イギリスから潜水艇を呼んで助けるわけにもいかない。7日間の空気と7日間の水を搭載していても、どうなることか？ 上ではすごく心配してくれているし、ジョン・ジュリーも興奮してしゃべっているのに、私も三笠さんも英語は強くないし、とにかく周辺があまりにも不思議な光景だったのでそれに見とれていました。そうすると、頭蓋骨みたいなものがいっぱいあるんです。ジョン・ジュリーに「ほら、あそこに行ってよ。あそこに頭蓋骨

がある」と言い、近付くとそれは巨大な貝でした。そこには兵士達の靴も水筒も、沈没の前夜飲んだ日本酒の空きビンも、朝の起床を知らせ、夜は就寝を知らせたラップも、それからハンモックも、みんなあり、その中に混じって巨大な貝がある。

数年前にリメイクした『私は貝になりたい』という作品があります。昔、フランキー堺さんが主演して大変評判になったドラマです。これは1人の床屋の何でもない市民が戦争に巻き込まれ、BC級戦犯として相手側の捕虜を殺したということで死刑になったんです。彼は本当は戦争なんかに行きたくなかった。けども国民の義務として戦争に引き出された。その男が死ぬ前にいったのが、「もう人間には生まれてきたくない。海の底の貝になりたい」という言葉でした。まさに私にはその巨大な貝は1人ひとりの大和の戦死者たちのように思えました。東シナ海には大和だけが沈んでいるわけではありません。巡洋艦矢矧をはじめ、たくさんの駆逐艦が沈んでおります。ですから海の墓標委員会と名付け、海で亡くなった方々の鎮魂祭を初めて東シナ海でやったわけです。私は大和が見つかったことよりも、戦後40年経って大和の慰霊祭が、たくさんの方達のお陰でできたことをうれしく思っています。

東シナ海の旅から帰ってきて、たくさんの方達に報告の旅に出掛けました。岡山の道男さんのお母さんにも会って、「申し訳ありませんでした。遺骨は一片も見つかりませんでした」と申し上げました。そしたら、小梅さんと言う道男さんのお母さんは「わたしはこれで安心して死ぬ。道男に会うのが楽しみになった。きっと道男は海の底の貝になったんじゃない」と言いました。

私は作家として昭和史をずっとやってきました。戦争だけでなく、例えば野球の天下弘であるとか、今まで書いてきました。みんな昭和史をひたすら一生懸命に駆けた人たちです。私が書く男たちは偉い人たちではありません。歴史の中の表舞台に出てくる男たちではない。歴史の裏側で、ひっそりと死んで行

った男たちが多くいます。青バットの天下弘は、その意味では珍しいかもしれませんが。でも彼もまた不幸な半生を生きております。神戸で私生児で生まれ、白系ロシア人の子ではないかと言われます。母は青森県の八戸の芸者で、神戸で私生児を産み落とし、台湾に行く。その男の子が戦後100日目にして始まった野球で、初めてホームランを打つわけです。青バットの天下弘。これは日本が戦争に負けて残ったのが、青い空と野っ原だけだった。そのころは「りんごの歌」というのがみんなに歌われていました。そこで天下はバットを青く塗って、せめて戦争で破れ、何もかも奪われた人たちに希望の火を与えたい。野球で与えたいと考えました。そういう男だから私が書いたのです。

大和だけでなく、私が書いた男たちは例えば同じ広島で真珠湾で亡くなった後藤元（はじめ）さんという人のことも書いております。この後藤さんもやっぱり志願をしております。お家がそれほど裕福ではなかった。あの真珠湾では潜航艇では9名、それから艦上爆撃機では55名が亡くなっておりますけれども、後藤さんはその中の1人でした。実は平成4年11月、ハワイでハリケーンがあったとき、戦後52年目、真珠湾から52年目に後藤さんの飛行機の破片が見つかったんです。不思議です。海底に落ちた飛行機が、ハリケーンで真珠湾攻撃の52年目に見つかりました。そしてそれは今も真珠湾のアリゾナ記念館に展示されています。今年の8月、私は娘とこの真珠湾に行きました。私の娘はアメリカ人と今年8月に結婚しましたが、夫は樹木医、木のお医者さんをしております。

実は娘が大学院に入ってアメリカに行った年はパールハーバー50周年記念でした。アメリカ各地でこの50周年の記念展が行われておりました。それで娘は、その大学および大学院の記念祭にたまたま行ったんです。その時、日本人は1人だったそうです。そして経済学部出身の学生たちから、「日本人は今、またパールハーバーと同じことをやっている。経済でアメリカを犯そうとしている」と集中攻

撃したそうです。その時、娘を助けてくれたのがネイティブ・アメリカン出身の少女だったそうです。彼女はすくって立ち上がり、「あなた方にそう言う権利はありますか？ 今やあの真珠湾は暗号も解読されていて、ルーズベルトはアメリカ人がもう戦争は嫌だと思っている時に、『リメンバー パールハーバー』と言ってアメリカ人の士気を昂揚させ、そして日米開戦に踏み切ったのは分かっているじゃないか!? 私たちネイティブ・アメリカンを追い出した時のように、今同じことをするのか？」と発言してくれたそうです。私の娘はそれを聞いて、自分は日本の歴史を知らなかったとあわてて国際電話をかけてきて、とにかく太平洋戦争の資料がほしい。太平洋戦争は何故起こったのか？ 真珠湾のこと、それから日本国憲法なんでもいいから送ってくれと云いました。つまり娘は、アメリカに行って、恥ずかしいことに自分の国の歴史を再認識したんです。私自身、子供に戦艦大和の取材のことも、いろんな遺書が来たことも娘に語っていたのですが、どこか頭で受け止めていた。「あなたのおじいちゃんは2等兵で戦争に行つて、戦争から帰ってきてもたくさんの方達が亡くなったことを話していたのよ。だからママは太平洋戦争を何とかして知ろうとして勉強しているのよ」、そう語ってんだけど娘にとってはやっぱり遠い出来事だった。でもアメリカに行つて、自分の国の出来事を自分が知らなかったことに気付いたというわけなんです。よく私たち日本人はこう云います。「何で、まだ戦争のことを語るの？ 半世紀も経ったのに」、ところがアジアに行くともうそうではありません。例えば韓国に行きますと、秀吉の朝鮮征伐から始まります。私は『ラーゲリーから来た遺書』という本で、シベリアで60万人以上、今では70万人ではないかと言われる日本人の捕虜たちのことを書きました。このときもソ連の人たちは何と言ったか。「日露戦争の復讐だったんだ」と言いました。歴史を見る尺度が違うんです。私は、日本人がもう戦争は終わったことだと言いつつ続けている限り、国際社会の一員

としては認められないと思います。

ブラジルで地球環境を巡るサミットがあったとき、残念なことに日本に与えられた賞はベビー賞でした。つまり赤ちゃんだとうんです。日本は環境問題においては赤ちゃんだとうんです。これはあらゆる意味で不幸なことに続いております。昭和20年に戦争が終わって、私にとっては父であり、私の子供にとっては祖父であるその人々が、日本の国を立ち上げるために一生懸命になっていた。それこそ大変な苦勞をして、まがりなりにも経済大国と言われるようになった。しかしその反面、大きな忘れ物をしたのではないかと。その忘れ物は、文化であったり、大事な心だったのではないかと。思うんです。

平成になってバブルがはじけまして、そして今、日本は「不景気、不景気。リストラ、リストラ」と言います。本来、私はちっともあたふたすることはないと思うんです。バブルだった時の方がおかしかったと思うんです。バブルで、私たちはお金が一番大切だと思ってしまった。心を忘れてしまった。今、少年たちがいろんな犯罪を起こすのはそのツケでもあると思います。苦勞した人ほど子供に贅沢をさせて苦勞をさせたくない。その反動が確実に訪れていると思います。本来ならば子供は苦勞をさせてもいいと思うんです。私は今でも覚えていますけれども、例えば食事の時、母親は父親と子供たちの食事を別にしました。必ず父には1品多かった。それは父は外で働いてきているからです。今、妻たちは夫よりも子供の方なんです。これは1つは家庭も顧みないで会社のため会社のためにとやってきた男たちにも責任があるかもしれない。でもやっぱり、働いてきているお父さんなんだということは、子供の中に植え付けられていくはずだと思えます。母親が夫よりも子供が大事と思った家はだめだと思えます。

あらゆる面で今いろんなことが問われているときです。これは例えば戦争の歴史そのものではない。例えば私がポーランドに行った時のことです。私は必ずいろんな国に行くと教科書を見せてもらいます。ポーランドの教

科書の方が、日本の原爆をきちんと書いています。どういうことなのでしょう？ 当時、私の子供は高校生と中学生でしたが、私は帰ってきて子供の教科書を見ました。ちゃんと歴史を教えていない。また、ポーランドで日本の原爆展が世界で初めて行われた時に、ポーランドの人々は買い物カゴを下げたお母さんや、小学生や中学生までも、みんな見にきていました。戦争ってというのはこんな残酷なものなんだということを、家庭でも学校でも話し合う場所を持っているんです。だけどその歴史ですら日本はきちんと教えていない。

今日はいろいろたくさん話したいことがありましたけれども、もう時間もなくなりました。最後に、私が昭和史をやろうと思ったのは、自分の父が2等兵として赤紙で召集され、そして帰ってきた。かつて父は学校の先生でした。しかし戦争から帰って来て、「もう子供たちに学問を教える資格はない」と言って教師を辞めて、家の6畳で本を作る仕事を始めました。父は昭和50年に肝臓ガンで58歳で亡くなりました。その父親が、「自分の戦後の人生は、太平洋戦争のたくさんの死者たちのお陰であるんだ」と娘の私に語ったから、私が戦争って何なんだろうということを書き始めるきっかけになったわけです。

私の出発点は民俗学でした。民俗学は柳田國男さんを中心として、日本の各地の昔話・伝説・世間話そして風俗でした。ある意味で民俗学は、生と死の学問であり、暮らしです。日本の故郷の良き慣習も集めております。今年20世紀最後の年、新しい21世紀が始まります。今、次の21世紀の子供たちに私たちがバトンを渡すべきものは何なのか？ 私なりに今度考えてみました。それで4つのキーワードを考えました。1つは故郷です。自分が生まれ育った故郷の良き、良き慣習を子供たちに植え付けること。2つ目は絆です。親子の絆、友達同士の絆、姉弟の絆、いろんな絆があります。命が大切だということ、それを子供たちに教えることだと思えます。まず人間の絆ということをしかりと次の世代に伝えたい。そしてその次が、今、死生学が問題にな

っております。尊厳死の問題とかいろいろありますが、より良い死を迎えるには、やはり私たちが1日1日をよりよく生きること。より良く生きることがより良い死を迎えることではないかと思えます。そして4番目に歴史です。戦争を、もう50年ではなく、まだ50年ちょっとしか経っていないんだということで、しっかり次の世代に引き渡すこと。それが、国際社会の中での日本人の在り方として大事なのではないかと思えます。まず故郷。故郷はひいては日本ということだと思えます。かつ

て戦死した学徒出陣の若者たちは、自分は日本に首ったけだと、だから無条件に死んで行くんだと手帳に書いておりました。母よ忘れよと書き、最後のページに俺の母は世界一だと書いた。そういう青年のことを思うにつけ、故郷と同時に人間としての絆の大切さ、そして生と死。そして戦争を初めとして歴史をしかりと直視し、そしてそこから21世紀を出発させたいと私は思っております。

今日はどうもありがとうございました。

略 歴

辺見じゅん HENMI JUN

1939年、富山県生まれ。早稲田大学文学部卒業。1975年、父（角川書店創業者・角川源義さん）の影響を受け作家としてデビュー。現在、作家・歌人として活躍中。

主な作品

【昭和史や民俗・民話などを追究した作品】

- 「呪われたシルク・ロード」
- 「男たちの大和」 (1984年新田次郎文学賞受賞)
- 「収容所からきた遺言」 (1990年大宅壮一ノンフィクション賞・第11回講談社ノンフィクション賞受賞)
- 「夢、未だ盡きず」 (ミズノスポーツライター賞 1999年度)
- 「はじめて語ること (対談集)」
- 「花子の国の歳事記」
- 「昭和の遺書 南の戦場から」 2000年春刊行

【歌 集】

- 「關の祝祭」 (1988年現代短歌女流賞受賞) など